

連載

EICA

環境職種事業体技術エキスパートの目

札幌市北区土木部長

藤田 哲男
Tetsuo Fujita

プロフィール

1979年 京都大学大学院衛生工
学科修士課程修了
1979年 札幌市水道局入局
2011年 札幌市北区土木部長

1. 所管業務の概要

大学では3年間、「生ごみからの効率的なメタン回収」をテーマに研究してきましたので、札幌市役所に入って25年目の平成16年度にようやく廃棄物の減量・リサイクルを担当できたときには率直に喜びました。

札幌市は当時から廃棄物のリサイクルに関しては積極的に取り組んでいました。現在では、びん・缶・ペット、容器プラ、乾電池、蛍光灯、大型家具、廃食用油、布・毛布、主要古紙類・雑紙、剪定枝、小物金属、そして家庭で作ってもらった生ごみ堆肥も回収してリサイクルしています。特に重要資源である古紙類の回収は、民間が行う集団資源回収の他、①公共施設などに設置した回収ボックス29か所、②回収会社店舗などの回収協力店66か所、③コンビニ（数不明）、④リサイクル地区センター3か所で回収しています。

2. ごみは宝の山

ごみの世界では昔から、「混ぜればごみ！分ければ資源！」が基本中の基本であり、市民の協力が欠かせません。写真は、5年前に訪れたミュンヘン市に12か所あるリサイクルセンターです。ここには30種類を超える資源ごみを市民が持ち込めます。「分ければ資源」を環境先進都市で実感することができました。

私に「ごみは宝物」を教えてくれたのは、ごみを燃料などとして活用できないかを研究している団体（製紙メーカーや製セメント、廃棄物処理業関係）の方です。清掃工場に持ち込まれるごみを見て、「もったいない！」を連発していました。市が提供したごみをもとに固形燃料（RPF）を作って検証もしていました。

3. 職務上体験した印象深いできごと

このように宝物に変身する札幌市のごみを狙って？多くの企業の方がいろいろな話を持ち込んできます。ここでは、廃食用油をめぐる2つの話題をご紹介します。

廃食用油から生成されるBDF（バイオ燃料）は地球にやさしいエコな燃料として当時脚光を浴び始めており、あの京都市さんが町内会での回収やレストランなどから購入した後、市の施設で大規模にBDFを製造し、市営バスの燃料として利用するという素晴らしい取組

を進めていました。

このような時期、全く無名な会社の名刺をもった30代の男性が、廃食用油の回収の企画を持ち込んできました。どこの部所にも聞いてもらえなかったらしく、最後に私のごみ減量推進課に来たようです。うちの仕事だろうか？相手を信用していいだろうか？などいろいろ考えましたが、会社のほうで回収拠点の開拓、BDF製造、販売などほとんどのことを行うという提案でしたので、市が協力することになりました。初年度の18年度は、回収場所9か所で5klの回収量でしたが、22年度には285か所で123klの実績となっています。

同じころ、建設会社を中心となって、大勢の関係者が参加する研究会が立ち上がり、市から私が参加しました。こちらの方は信頼できる人たちで、計画も素晴らしいものでしたが、全く前に進みません。市に何をしたいのか、ご自分たちでどこまでするのかははっきりしません。何回か話をしていくと「何から何まで市の方で」というのが本音のようでした。結局、この研究会は関連企業間の情報交換はできましたが、BDF事業化の目的は達成されていません。

行政にいろいろな提案をしようと考えている企業の皆さん！ご自分でどこまでするのかだけは明確にしたうえで行政にあたってください。

4. 廃棄物分野における企業・NPOへの期待

市が回収・処分している廃棄物の中には、まだまだ多くの宝物があります。「リサイクルされていない製品プラや木質系ごみなど燃えるものは何でも引き受けます」という方が多くいます。残った生ごみはどうなるんでしょう？また、家庭系生ごみを1万t程度リサイクルする企画を提案してきます。市が家庭から回収するとなると10万t集まりますが、残り9万tはどうすれば？

欲しい物だけを欲しい量だけというのは、大変困ります。

個人的な期待ですが、市が回収する廃棄物全般を対象にした話が聞きたいものです。そのためには、いろいろな業種の人たちが、具体的な数値をもとに現実的な方法を検討する必要があります。今は部外者の立場ですが、企業・NPOの方々のご活躍を期待しています。



Photo. 1 リサイクルセンター